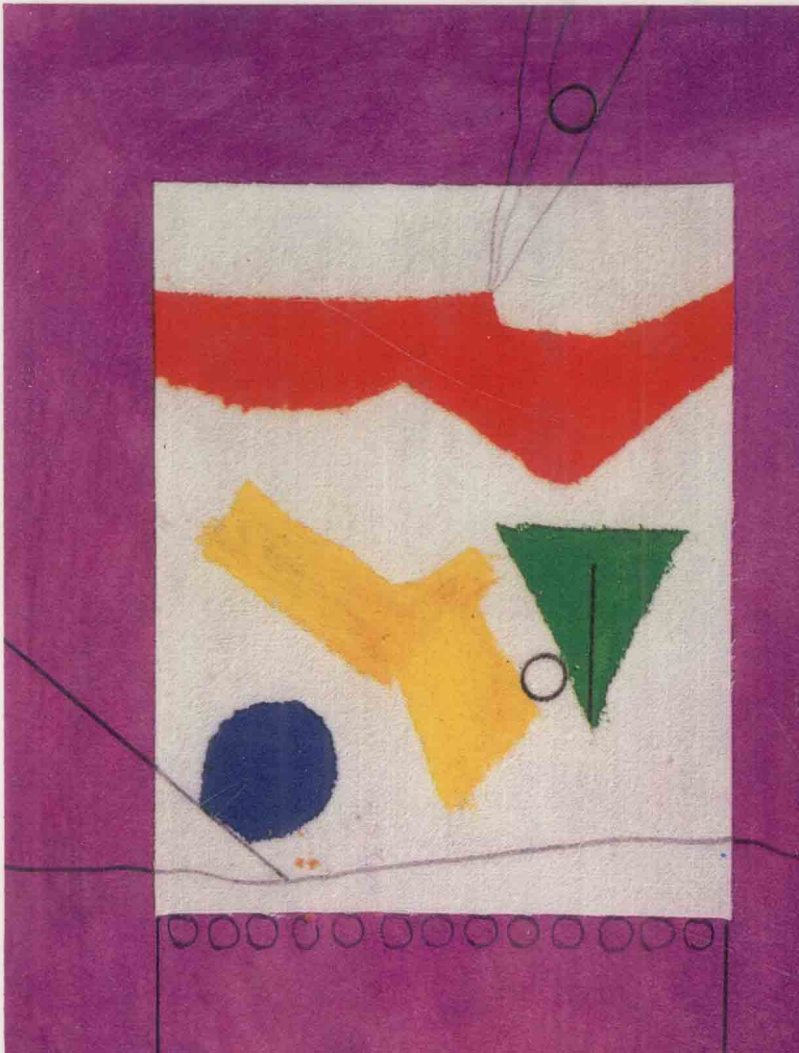
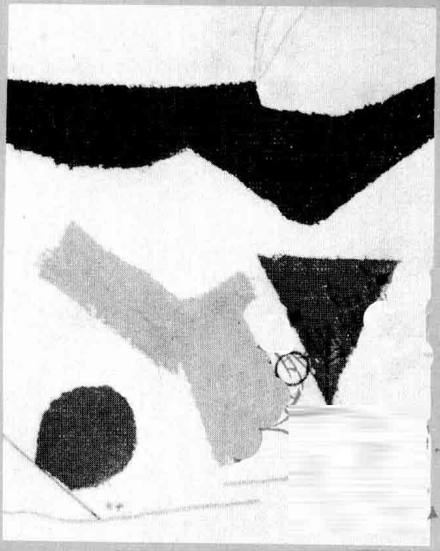
こころ（下）

瀬戸内晴美



こころ（下）

瀬戸内晴美



講談社

こころ　下
一九八〇年二月二〇日第一刷発行

著者——瀬戸内晴美（せとうちはるみ）
© Setouchi Harumi 1980, Printed in Japan
発行者——野間省一
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一二一　電話東京〇三—九四五—一二一一　振替東京八—二九二〇
印刷所——豊国印刷株式会社　製本所——藤沢製本株式会社
定価——九五〇円
落丁本・乱丁本はおとりかえします。

0093-163950-2253 (0)　（文1）

こころ　下

目次

入江 7
水脈 29
新樹 52
南風 70
めぐりあい 93
青い頁 113
螢川 135
よしこの 156

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

異邦人　176
さるすべり　200
向日葵　220
ひぐらし　239
鈴虫　260
花束　279
潮騒　300
風の声　317

装画・猪熊弦一郎
装幀・山岸　義明

こころ　下

入　江

啓子はもうさっきから何度めかに、また壁の時計を見上げた。船で早朝小松島について、列車に乗りかえてくるとして、もうそろそろ着いていい時間だと思う。

昨夜、純二からいきなり電話がかかった時は、ほんとにびっくりしてしまった。すぐには純二と名乗る名が結びつかなかった。

「おばさん、ぼくのこと覚えてないんですか」

「あの……あの……」

「藤巻純二です」

純二は一語、一語に力をいれて、もう一度名乗り直した。

「わかってますよ、忘れてなんかいやしませんよ」

啓子はあわてていった。

「あんまり突然だから、びっくりしただけよ」

「それじゃ、ぼくが今からそちらへ行ったら、もっとびっくりしますか」

「ええっ、今、どこからかけてるの」

ようやく啓子は、人の視線を集めずにはおかない美少年の俤(おもかげ)をはっきりと目の前に呼びおこした。

「大阪から。連絡船の待合室にいます。そちらへ、行きたいんだけど、いいですか」
「ええ、ええ、そりゃ、もう」
啓子は、ついこの間、文子からの手紙で、今年も純二が受験に失敗したことを知っていた。
小松島からの道順を教えて、電話を切ってから、すぐ受話器を取り直し、啓子は東京の文子へ電話をした。
「たった今、純二さんから電話があったのよ」
「ええっ、純二からですって、いったい、どこから」
文子の声があんまり愕いたので、啓子の方が緊張した。
「大阪からですって、明日こっちへ見えるっていうの」
文子は、声が出ないふうで、大きなため息が伝ってきた。
「何を考えてるんだか、さっぱりわからないわ。もう予備校へゆく気がないみたいで、自分で何とかやるなんて大きな口きいて、ほとんど家によりつかなくなってしまったの」
「でも、とてものんびりした口調だったわよ」
「だから、困るのよ、うちはあの通りのんきでしょう、梓は私が甘やかしたからだって責めるし、立瀬がないの」
文子の口調は、学生口調にもどって啓子に訴える。
「でも、そちらのことなんか、ほとんどうちであの子との話題に出なかったのに……変ねえ」
文子はひとりごとのようにいった後でつけ加えた。
「この間、国東半島の峯入りしてきたなんていうのよ、嘘じゃないらしく、写真なんかも撮ってきたのよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「峯入りって、あなた、そんなに簡単なものじゃないわよ」
「でしょう、だから、何だか気味が悪くなって」
とにかく、瑞泉寺についたら、すぐ電話で知らせてくれといって文子との長い電話は切れた。純二が瑞泉寺を思いだしたりしたのは、峯入りと無関係ではないように思う。
宏泰の意見によれば、この頃は一種の仏教のルネッサンスといわれた時期があったんだよ。それ以来じゃないのかな、
「昭和のはじめに一度仏教のルネッサンスだというのだ。
今度のは。あの頃は凄い不景気で大学卒業者の失業者があふれた時なんだ。今度もまあ、学士ルンペンのようよしてきた時代だから似てないとはいえないがね」
「昭和のはじめより、今度の方が世紀末的現象が強いでしょう。そんなこともあるのかしら」
「ないとはいえないが、まあ、一種の風俗的流行だね」
「流行なら、飽けば、すぐすたってしまうでしょう」
「すたっても、飽かれてもいいさ。とにかく、波が一度うちよせてきていることは確かな手応えだからな。波に乗らなきゃ駄目だな、われわれの立場としては」
啓子は宏泰と話していると、つい話が現実的に処理されてしまうようで何となくひっかかるものがある。
「今度の波の現象として目立っているのは、若い者がこれまでにない関心を見せていることだな」
「そんなに若い人が関心をよせているかしら」
「この間、京都へ行った時、嵯峨野をのぞいてみたが、すごい人の列だった。それがみんな二十歳前後の女の子やその恋人といった風情なんだな、中年の男女というのはその四分の一にもたりない」
「そうですか、でもそれは週刊誌なんかで嵯峨野がいいと宣伝されて、ピクニックのつもりなんでしょ

う」
「それでも、みんな一応お寺めぐりをしているからな。あそこへいってお寺の一軒ものぞかず帰る人間っていうのはまあいないな、大原しかり、東山界隈しかりだ。こんな現象は何十年もなかったことだよ。第一、寺の裁判沙汰が多いのだって、みんな金にからんでいるじゃないか、もうかってる証拠だよ。仏教ルネッサンスだな、やっぱり」
宏泰は声をあげて笑った。
若者が参禅したり、メディテーション教室というのに通ったり、写経会に出たりする姿がつとに多くなっていると聞かされても、啓子はぴんと来ない。
瑞泉寺に集ってくる若い男女が必ずしも仏教に関心を寄せているとも考えられないのだ。しかし自分の若い頃に比べたら、たしかに彼等は飽きもせず瑞泉寺の本堂に坐りこんだまま、本尊を見上げて何時間も動かなかったり、縁側で膝を抱えたまま、ぼんやり半日も入江を見下してすごしていることが多い。第一、あの狂熱としかいいようのないノートのつけ方は何であろう。
「仏さま、お願い、どうかアコの悩みを救って下さい」
そんな文章まで仏縁と呼ぶのかどうか。
娘の和美は、二ことめには、
「わたしはいやよ、お寺なんかもうこりごり、坊さんの養子でも何でももらって、この後ついでよ。わたしは外へお嫁にいきたいわ。財産なんか、なんにもいらんから」
といいだす始末だ。
ひとりっ子なので、
「ゆくゆくは和美ちゃんに坊さんのお聟さんがいるね」

と、麓の漁師たちが寺に来ていうのを聞き、今から自分の前途をきめられてしまうのが不安でやりきれないらしかった。

「だって、これだけのお寺、和美が後をつがないと、損だと思うけど」

「いやあね、おかあさんだって、お寺へなんか嫁入りするんじゃなかったって、しょっちゅういってたくせに、あんなこといってる」

そういわれると、啓子は返すことばもない。

まあ、まだ先のことだからと思っていたが、和美も今年は大学に入った。宏泰が遠くへ出したがらず徳島の大学へいれようとしたが、和美はきかなかった。東京へゆきたいというのを、どうにかなだめて、京都の大学を受けさせた。

律儀な性質の上、宏泰似の頭のよさで、啓子は和美の受験で他の母親のように心配したことはない。何でも、和美は自分でとりきめ、田舎だから、心配だといって、必死に勉強していた。

関西で三つ受けた大学を三つとも通ったから、啓子は文子から純二のことを聞かされた時、挨拶のしようがなかった。幸いなことに、文子は自分の苦労に心を奪われていて、和美のことを忘れていた。啓子はそれを好都合にして、和美のことはいいださなかったのだ。

京都の大学にきめ、室町の実家から通わせることにきめ、入学式にもついていって、啓子は一まずほっとしたところなのだ。

和美の借りた部屋は、娘時代、啓子が使っていた離れで、啓子の頃とほとんど変っていなかった。啓子は和美をはじめて手許から離した淋しさも、あの部屋に眠っていると思えば、和美の夢の中まで想像出来そうで、何か安堵があり慰められた。

純二の美しさや爽やかさを思い浮べると、今、和美に逢わせてやれないのが残念な気がする。しかし

純二や和美のような年頃の男女が、どんなつきあい方をするのかと思うと不安で、丁度和美がいなかったのは幸いだったかと思ったりする。
駅まで出迎えに行ってみようかと、啓子が立ち上った時、縁側の方で声がした。
「ごめんなさい」
「まあ、純二さん、今、迎えにいこうかと思ったところよ」
啓子は縁側へ走り出て両手をさしだすようにして純二を迎えた。
海と空を背にして立った若者は、背が高く、ジーパンをはき、青いシャツの片方の肩にズボンと揃いの上着を投げるようにかけている。記憶の中の純二より、一まわり大きく、たくましくなっているように見えるのは気のせいだろうか。
「ようきたわね、ほんとに、さあ、おあがんなさい。縁側からでいいのよ」
純二ははじめて来たとも思えない遠慮のなさで、いわれた通り縁側から上ってきた。
「いいところですねえ、想像以上だったな」
縁側で、もう長い脚を抱いて柱にもたれ、入江を見下している。折から沈みはじめた夕陽が波を染めて、茜色の波に金粉をまきちらしたように見える。沖から帰る漁船まで真赤に染めあげられている。
風もなく、海はとろりと凪いで見えるのに、オレンジ色の翅の無数の蛾が波間に溺れかけているように波がきらきら光りつづけている。
「どこから来たの」
啓子がお茶をいれながら訊いた。
「どこからって……」
「東京からじゃないんでしょう」

「ああ、そういう意味、近江の方を歩いてたんです。それからふっと、ここ、お寺だったなあと思いついて、来てみたくなったんです」
「お寺に興味があるの」
「お寺にってことないけど、この間国東の峯入りに出逢って、ついて歩いたから、何だか気になりだしたんです」
「国東の峯入りですって、あれは大変なのよ、行者さんといっしょに歩いたの」
「や、おばさんはさすがだね。うちじゃ、両親も姉も、峯入りが何だかわかっちゃいないんだ。説明しろっていわれたって、全然知識のない奴らに、話す気しないもんね」
「そりゃ、無理よ文子さんには」
「ここ、天台でしょう」
「そうよ。うちの主人は、行が好きで修験道もやってるから、わたしだって峯入りが何かってことぐらいわかったのよ」
「へえ、凄いなあ、修験もやるんですか」
純二は急に顔を輝かせて興味深そうにいった。啓子の目には夕陽の反射が、まるで海から届いて純二の美しさを輝かせているように見えた。
「吉野なんかによくゆくわ」
「じゃ、いよいよ都合いいや、おばさん、おじさんに頼んで、ぼくしばらくここへ置いてくれませんか」
「そりゃ……いいけど、だってあなた、まだ受験勉強があるんでしょう」
「もうやる気ないな」

「だって、それじゃ、文子さんが」
「ええ、母にだけ悪いなあって思いますよ。あんまりショックで、風邪ひいて下痢なんかして、寝こんでましたからね」
「人ごとのようにいうもんじゃないわ」
「あれで、とても神経が細いんですよ、普段は、今みたいな試験制度はまちがってるなんて、批判してるくせに、いざぼくがまたもや落ちたとなると、病気するほどこたえるんだから、建前と本音がずれすぎてますよ」
「あなたの話聞いてると、落ちたのは外の人のような気がするわ」
「そうでしょうね、だって、ぼく自身が信じられないんだもの」
啓子はとうとう笑いだした。
純二にはじめて逢った宏泰は、さすがに男のせいか、啓子ほど愕きもしなければ、あわてもしなかった。
いい酒の相手が出来たというように、夕飯に、ビールやウイスキーをすすめて、話し相手になっている。
純二は強いらしく、顔は桜色に、少女のようにす速く染めあげるくせに、それからは同じ調子でいくらでも宏泰の相手が出来る。
「相当いけるな」
宏泰は面白そうに目を細めてつぶやいた。
「友達がみんなのみますからね。平均的ですよ、おれの酒量なんか」
「ほう、そうかい、みんなそんなに強いか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c